社会福祉法人 恩賜財団
東京都同胞援護会
TOKYOTO・DOHO・ENGOKAI

同援だより

2010年　秋　号
http://www.doen.jp/

介護と雇用

常務理事　菅原 眞廣

新しい菅内閣は、「雇用の創出」を経済政策の柱としています。六月に政府が発表した「新成長戦略」では、医療・介護・健康関連産業を日本の成長牽引産業と位置づけていますし、先の代表選においても、菅総理は「介護や医療などの分野における雇用の創出」を訴えていました。

確かに、介護現場では人材不足が依然として続いていますし、今後は、数十万人単位の人材が必要といわれています。他方、若者の雇用悪化は深刻であり、失業率も高止まりしています。うまく政策誘導すれば、介護分野が雇用拡大の救世主になる可能性はあります。

雇用が介護分野に拡大していくためには、賃金をはじめとする職員処遇を改善することが重要なのは言うまでもありません。介護報酬の改定や処遇改善交付金のおかげで、少しは給与改善がなされたわけですが、まだまだ他職種に比べ低いのが現状です。

しかしより問題なのは、介護職に対する負のイメージが世間に定着していることです。「給料が安く結婚もできない」「仕事がきつく、身体を壊しやすい」といった現場のリポートが新聞やテレビで流されてきました。このため、福祉関係の学校に行こうとする子供を親が引き止めるといった事例も聞きます。こうした負のイメージを払拭するため、介護の仕事のやりがいや魅力、介護の専門性をどれだけ私たちが世間にアピールできるかが鍵だと思います。メディア戦略を含めて、私たち「業界」全体で取り組むべき課題です。

いきいき福祉サービス

高齢者支援系グループ

国際的視野の下での「介護職員の技術向上のための取組」

原町ホーム介護職員の技術向上のための取組検討委員会
原町ホーム　園長　岡本　勝巳

先駆的取組へチャレンジ

急速な高齢化が進み、わが国は高齢化社会から高齢社会さらに超高齢社会へと進んでいます。この間、介護サービスを必要とする高齢者に対する適切なサービスを提供するべく原町ホームにおいても二十数年の歴史をもって最善の努力を積み重ねてきたところです。

しかしながら、今日の高齢化の進行は単に数量の増加だけではなく、後期高齢者の増加と言う質的課題をも併有しています。これに伴って介護サービスの内容は多様化し、高度な知識や技術が求められているところです。

このような状況の中で、介護サービスの質の確保や介護職員の技術向上、評価方法のあり方を探求することは、施設利用者にとって本質的なサービス向上に繋がります。このような認識の下に、昨年度、原町ホームでは東京都の介護職員の育成や技術の向上をはかるための「先駆的取組に対する加算事業」を実施してきたところです。

原町ホームのこれまでの介護は、いわば施設開設以来の二十数年に及ぶ経験に基づき蓄積された介護技術です。その特徴は施設利用者の日々の要望やリスクマネジメントを加味した経験知から来る手作りの良さです。

しかし、介護技術は日々向上しており、国際的視野の中でより優れた介護技術として検証され、発展してこそ施設利用者にとっての本質的なサービス向上に繋がります。当施設においては、この点を課題として捉え、日本・スウェーデンの具体的比較検討の中で二十一世紀の介護技術向上のモデルとなるよう試みてきました。

持ち上げない介護へ

この取組の中で、施設における介護技術を評価するためのチェックシートを作成し、スキルアップの達成状況を確認する仕組みを整備して参りました。特に、多くの施設で課題となっているご利用者の移乗や移動についてスウェーデン・クオリティ・ケアと協働して、移乗、移動介護技術を学ぶ機会を設けました。とりわけフレックスボードを使用した「持ち上げない介護」について大変多くの学びを体験しました。

これまで、原町ホームでは、移乗全介助のご利用者にはバスタオルを使った「持ち上げる介護」を行って来ましたが、それには利用者、介護職員双方にとってのデメリットがあることが分かりました。

「持ち上げられる」という動作は、通常の私たちの日常生活の中にはなく、また、「持ち上げる」行為は利用者を重力に逆らって動かすことになるため職員に大きな負担がかかります。「持ち上げる介護」を行うとき、職員の「緊張」や重い利用者を抱えるという「負担感」は、実は利用者に伝わっており、それを感じ取った利用者は、移乗介護に対して「辛い」「嫌なもの」「されたくない」といったマイナスの感情を持つことがある、ということを学びました。

このような分析の上に、現在「持ち上げない介護」の導入を進めているところですが、実際に行ってみた職員から「従来の持ち上げるやり方より良かった」「利用者も負担が少ないのではないか」という感想がある一方で、「ボードの使い方が難しかった」という意見もありました。技術を十分に研鑽して臨まなければならず、そのための研修システムや指導方法の整備を進めているところです。

技術向上をみんなのものに

今後は、施設全体として普遍化してゆくために職員一人ひとりが「持ち上げない介護宣言」を行って、ご利用者のための優れた介護が組織としてできるよう取り組んでいく所存です。そのため二〇一〇年度はケア向上委員会を立ち上げて進めているところです。

本取り組みから得た成果は、本ホームのみで活用するのではなく、同様の課題に取組むべき多くの施設で活用できるよう積極的に機会を求めて参ります。

障害者支援系グループ

スタート!! 就労支援室「さいわい」

さいわい福祉センター
支援員 高橋千代子

「これまでの取り組み」

さいわい福祉センターはこの九月一日より、東久留米市障害者就労支援事業・就労支援室「さいわい」を、新たにスタートしました。

センターでは、平成八年の開所当初より、障がいがあっても、「働きたい」というニーズを捉え、望みが叶えられるように企業就労への取り組みを行ってきました。

東久留米市雇用促進連絡協議会のモデル事業と協働して、市内企業の意識調査や職場開拓などを積極的に行い、十数名の方を企業就労へと繋げることが出来ました。

しかし、不況の影響で就労者の解雇が増え、再就職のための相談・支援などが多くなり現実の厳しさに直面しています。

「就労前の支援」

職場の即戦力になれるよう、実際現場で使用している機材を用いての練習、パソコン・漢字の練習、履歴書の書き方、面接の練習など、利用者と一緒に知恵を出しあって奮闘してきました。

今日、障がい者福祉の制度改革の流れの中で、障がい者の企業就労がクローズアップされ、就労支援施策が徐々に整備されてきました。

東京都の障害者就労支援センターも次々と設置され、就労支援の重要性が、増してきました。

ジョブコーチ制度、トライアル雇用、特例子会社など、行政施策のもと企業側の変化も見られるようになりました。

また、特別支援学校からの卒後の就労支援の依頼や在学中の企業実習の同行依頼など、ニーズが多様化してきています。

障がいがあっても「企業で働きたい」「働き続けたい」という思いにどう応え、どう実現していくのかが私たちの普遍的な支援の柱です。

就労定着支援として、企業との円滑な関係を支援するだけでなく、企業で働く者同士が励まし合い、仕事に対する意欲や活力を養う、また情報交換の場として、日帰り旅行やボーリング・カラオケ・納涼会等を開催してきました。

さらには、定期的にセンターに立ち寄って、お茶を飲みお菓子を食べながらお互いの気持ちや職場等の悩みを相互に相談する場をつくり参加者が広がってきています。

また、働くなかでは、生活面でのサポート不足が、企業側から指摘されることもあり、定着支援の重要なポイントになっています。

東久留米市は、これまでのセンターの就労支援の実績とこれからの期待を含めて、当センターに就労支援事業を委託し、主に知的・身体の障がい者の就労支援を担うこととなりました。

「就労支援ネットワーク」

東久留米市の就労支援事業は、二事業所で役割分担をしており、相互に連携して支援を展開していけることは大変心強く思います。今後は東久留米市における就労支援ネットワークを構築し、関係機関と連携を強化し、更なる支援の充実を図りたいと思います。

「就労支援室として」

障がいのある方も厳しい荒波を一つひとつ乗り越えて、一生懸命働いています。「働きたいが、自分に合った働く場は少ない」という厳しい現実もあります。「継続して働いてもらいたい」というご家族の思いも伝わってきます。また、一人ひとり異なる障がい者を受け入れるという企業の戸惑いがあるのも現実です。

それぞれの〝思い〟や〝気持ち〟に寄り添いながら、課せられた役割を果たすべく開所以来の日々の取り組み、積み重ねを土台として、多様化するニーズに応えていく就労支援室を目指していきたいと思います。

保育支援系グループ

新事業に取り組んで

同援さくら保育園
副園長　唐沢江里子

平成十八年に豊島区初の民営化園としてスタートした同援さくら保育園もお陰様で、開園五年目となりました。

スタート当初は同援の保育園として初めて取り組む事業もあり、手探りでやっていく中で、改善していきながら進めていきました。今回は同援さくら保育園の特色でもある、特別保育事業について紹介していきます。

■延長保育

夜六時十五分から十時十五分までの四時間延長ということでこれを利用したい為に他区から転園してくる方もいます。

延長保育と併せて卒園児を対象に学童後保育（学童保育が午後六時で終了の為）も行っており、両方合わせて毎日平均二十五名くらいの利用があります。

乳児と幼児・学童に分かれて六時半頃に補食、夕食を食べてその後、お迎えまで年齢に合わせた遊びを提供し過ごしています。八時頃には人数も少なくなるので、畳のある保育室に移動してゆったり静かに過ごせるようにしています。九時を過ぎるとやはり少し眠そうなお子さんもいますが（時には仮眠させる事もあります）インターフォンが鳴る度に『誰のお迎え?』と嬉しそうに保育士に尋ねお迎えを待っています。

生活リズムが大切な乳・幼児期であることを保護者にも伝え、四時間延長を実施していますが、園と家庭が連携をして出来るだけ生活リズムを整えてあげられるようにしています。

■休日保育

年末年始以外の日曜、祝祭日に定員十五名で同援さくら保育園以外の豊島区内の他園のお子さんもお預かりしている事業です。平均六名くらいのお子さんが利用されています。「お休みの日はいつもと違う保育園」とお子さんの方は楽しみにしていて、他園のお子さん同士も仲良く過ごしています。

一歳の誕生日を迎えたお子さんから就学前のお子さんまでが異年齢で過ごし、小さい子の面倒を見たり、大きい子に遊んでもらったりなど無理のない交流が出来ています。

自営業や病院等にお勤めの方に、大変喜ばれています。

■病後児保育

働く保護者にとってお子さんの病気は心配と共に仕事を休まなくてはならないという点で苦労されていると思います。病後児保育は病気の回復期等でもう一日ゆっくり過ごせば、より治りも良く通常に登園出来るというような時期にかかりつけ医の診断により利用出来ます。

豊島区より委託された事業で一日定員二名の利用です。休日保育同様に豊島区内の他園のお子さんでも、区役所で登録をし、同援さくら保育園に利用予約をします。

病後児保育担当の看護師が中心となって保育にあたり、お子さんの状態に合わせて過ごしています。与薬をすることも出来るので、一度利用されると良さを実感されてのリピーターが多いです。

区内でもう一カ所病後児保育を行っているところとも、看護師が情報交換を行いながら進めています。

■一時保育

平日の九時から夕方五時までの間で一日定員五名の地域のお子さんをお預かりしています。一歳のお誕生日を迎えたお子さんから就学前のお子さんまでが利用出来ますが、乳児クラスの利用が多く、幼稚園が休みに入った時期に幼児クラスのお子さんの利用が増えます。

上のお子さんの学校や幼稚園の行事・保護者会の際に下のお子さんを預けたり、保護者のリフレッシュの為に利用されたりと様々ですが、最近では仕事に行く為に利用される方も増えています。

必要な時に必要な時間利用しますが、小さいお子さんは慣れるまでは泣いてしまいおんぶで過ごしたり、一時保育室を利用してゆったりと関わっています。利用された保護者からは、「同年齢の子と関わる機会がないので、クラスに入って保育をしてもらえるのが良い」との声が多く、泣かないで過ごせるお子さんはクラスに入ってもらっています。何回も利用されているお子さんは在園児と同様に関わっていく中で、成長を感じることも多く在園児も声を掛けてくれたり、一緒に楽しそうに食事をする姿が見られます。

以上のように年始以外は三百六十二日開いている同援さくら保育園は、利用者の口コミ情報が広がり、毎日のように問い合わせや登録・見学の希望があります。不況のあおりを受けてか、豊島区でも待機児が年々増えおり、当園でも待機児解消のために定員の弾力化をして百二十名のお子さんをお預かりしています。

保育の内容では、『生きる力を育てる保育』を目指して心も体もたくましく育っていけるように、様々な活動を取り入れ体験の幅を広げ、自信が持てる事を増やせるようにしています。中でも五歳児が取り組んでいる和太鼓はお祭り好きの土地柄もあり、親子共にとても好評で年長組になるのを楽しみにしています。同じ複合施設にある、特別養護老人ホームや老人保健施設にも伺って披露し、喜んでいただき、子どもたちにも良い刺激や自信になっています。

一部屋、一部屋ゆとりのある保育室に、都内ではなかなかない広い園庭にも恵まれた環境を大いに活用して地域に根ざし、地域の方々も巻き込みながらの保育園作りと共に、同援さくら保育園が目指している『生きる力を育てる保育』の充実に向け職員一同、力を合わせて進んでいきたいと思います。

児童女性支援系グループ

グループホームという新たな生活環境の中で…

双葉園グループホーム「高島の家」
ホーム長　相澤　靖

開設して一年半

平成二十一年四月一日にグループホーム「高嶋の家」が開設して一年半が経ちました。開設にあたっては、大きなご支援と多くの方々からのご指導ご助言をいただき本当に有難うございました。

開設に当たっては、双葉園本園のどの子どもたちにグループホームでの生活を提供するかから始まりました。家庭的な体験が少なく、長期的ケアが必要な子どもたちを小規模なケアの中で生活力・自立力を身につけさせたいと言う思いからです。そして、小学一年生から高校二年生の六人のグループホーム生活が始まりました。

発見と創造の喜び

グループホームでの生活は、以前より開始していた他施設からの情報は得ていましたが、一つひとつが発見の連続で、創造していくことに喜びを感じながら少しずつ自分たちで考え、グループホームの実質を創ってきました。

職員にとってグループホームでの業務は、即断即決の業務が多くなり、双葉園本園とは異なる課題に対応する必要があります。また子どもたちは、個人個人が親しみのある距離感となるグループホームで新しい人間関係を構築することが始まりました。最初のうちは安定しませんでしたが、時の経過とともに、子どもたちの中に安心とゆとりができると、新しい自分の座もでき、落ち着いてきました。

子どもたちの変化

大人より環境に適応する力は、子どもたちに備わっており、自らが家庭生活の一員として頑張らなければならないという気持ちが自然発生的に生まれるようになりました。そして生活感を整え、役割を与えなくても進んで家事の手伝いを行うようになってきました。

また、節約意識も芽生え、電気・ガス・水道の使用状況が身近で分かり、新聞の折り込み広告を見て、上手な買い物の仕方を会得したり、期待以上の生活技術が身につきました。先日も職員が買い物に同行できないときに、子どもたちだけでその日の献立を見て、必要な食材をきちんと人数分を考え、予算内で買ってきてくれたことに感動しました。また、料理をすることも日に日に上手になり、今ではおかず一品は、子どもたちに任せても大丈夫なメニューも増えてきました。さらに、少し時間のある午後には、料理の得意な職員とともに、子どもたちがパンやデザートを作っています。

一人ひとりの確実な成長へ

相手や周りの人を考えて、子どもたちが行動できるようになったことは、本人の成長の大きさと少人数ケアの効果が表れていると思いました。そして、子どもたちがこのような活き活きとした生活が継続できるために、支える職員も活き活きとした環境を保つことが肝心です。

歩き始めたばかりのグループホームですが、本園からの協力を得ながら、「高嶋の家」としてさらなる努力をして参りたいと思います。

昭島病院

新しい試み

医事課長　三口　信次

昨年、九月に昭島病院医事課に転職で勤務することになりました時に感じたものは、病院のハード面・ソフト面の環境が共に良い印象でありました。具体的には、一階の外来フロアーから四階の病棟に至る環境は、明るく、又、ゆとり感あふれるスペースが確保されていること、又、職員が挨拶を励行し、接遇を大切にしていることと共に爽やかな印象が強かったことです。これは、これから求められている環境だなと思いました。病院に来られる患者様も同様に感じられているだろうなという印象の中で就任いたしました。一方、その様な中で、医事課として、何か改善を図って、患者サービスの向上を目指したいという思いが、ありました。

その一つのチャンスは、数年前に導入した自動精算機の活用でした。当院の事務長から「自動精算機が稼動していない…」との報告と相談がありました。そこで、自動精算機が、なぜ、今まで稼動できなかったのかを問題にし、関係職員のヒアリングから現状分析を開始すると共に、医事課職員と共に自動精算機を稼動させ、ベストな患者サービス環境の実現と事務の効率化を目指し、改善案を作成しました。提案内容は、自動精算機までの患者様のスムースな流れの確保に着目し、動線の中に「会計番号表示機」を置き、実現を図りたいというものでした。この方法は、大病院では当然とも言える手法になっています。

稼動前後の業務形態を比較すると概ね、以下のような状況です。

稼動前の会計の流れは、①計算入力が終了する都度、請求・領収書が会計の専用プリンターに出力されるとともに、②医師が処方オーダーを入力する都度、会計の専用プリンターに出力される。③会計担当は①と②を併せ、カウンターの前の患者様を五名以上まとめて名前を呼び、一人ずつ支払っていただくというものでした。一方、稼動後は、①患者様に計算窓口で会計番号票を渡し、②計算入力が終了すると番号が表示されるので、一人一人、自動精算機で支払いを済ませ、院外処方せんを窓口で受け取り帰宅するという流れに変容しました。

自動精算機の稼動当初は「いままでどおりに名前で呼んでほしい」「機械は苦手だ」「番号が見えない」「前のほうが早かった」などの苦情・要望が多々ありました。このような状況の中で、課員が中心になり、医師、看護師・庶務課の協力を得て患者様のサポートに傾注し、現状のサービスにたどり着いています。

稼動後の効果としては、患者様の会計待ち時間が減少し、待合の混雑が緩和したこと、患者様の氏名（個人情報）を呼ぶことが減少したこと、予約入力の全医師の協力が得られたこと、予約券発行の標準化が図られています。又、事務・看護師業務の効率化も図られた。これらの成果は患者様全体のサービスにつながったと確信しています。

顧みると、自動精算機の稼働に伴い、一番喜んでいるのは、実は、待合フロアーの片隅に佇んでいた自動精算機と課員ではないかとも思っています。患者サービスに努めている、そんな時に、「患者様同士が会計の仕方を教えている光景（ボランティア）」を見るときは、言葉にならない達成感が得られます。

今回の「試み」は私的には、大成功と思っていますが、課員も同じと思量しています。その理由は、この間、課員と様々な意見交換を行い、知恵を絞り、シミュレーションを繰り返しながら、事務の効率化と患者サービス向上に向けて、そして病院全体の協力を得て、その成果が得られたからです。

最後に触れておきたいことは、「現状維持は、決して、現状維持にならない。向上心と努力があって初めて現状維持以上のことができる！」ということです。また、そのためには、様々な連携が必要です。

今回、自動精算機を活用したシステム化は、まさしく、その一つと思っています。今後も、いろいろと「新しい試み」に匹敵する課題は残っているし、また生まれてくると思います。

今後も、医事課は、今回の成果を今後に生かすとともに、一つひとつ、基本と目標を持ち、期待される昭島病院を実現していくことが必要と思量しています。

これからも医事課に期待とご指導・ご協力をお願いいたします！

新事業の病後児保育について

昭和郷保育園
看護師　徳留　優子

去年の秋、昭島市の委託を受け、平成二十二年度の新規事業として「病後児保育室」を開設する運びとなりました。

改築工事や物品の準備、必要書類のことなど、大変ではありましたが、無事、平成二十二年四月一日、新たに担当の看護師、保育士を迎え、病後児保育室「くろーばー」を開始することができました。

病後児保育室「くろーばー」の名前の由来は、「幸せ」のシンボル四つ葉のクローバーからとり、早く回復して元気に保育園へ行けるようにとの願いを込め、また柔らかい感じにしてみようと、ひらがなで「くろーばー」にしました。

「くろーばー」の定員は、三名です。対象者は、一歳から小学校就学前までの昭島市内の保育園に通園し、病気の回復期、けがなどで集団生活ができないお子さんです。開室時間は、月曜日から金曜日の午前八時から午後六時となっています。

くろーばーのお部屋は小さい作りですが、トイレやシャワーも完備されて、自宅にいるような環境を目指して造りました。できるだけお子さんがすぐにお部屋に慣れ、リラックスして、休養できるように心がけております。それぞれの年齢別の保育も取り入れ、また病気、けがなど、利用目的の違いで保育内容を工夫しております。

開始当初の四月は、登録に訪れる方々が多くいらっしゃいました。五月からは少しずつ利用者も増えてきています。その中で、リピーターの方も増えており、この「病後児保育室」の必要性を実感しています。

近年、核家族化が進み、生活形態も変化し、女性の社会進出や、ひとり親家庭も増えています。

そのような中で、子どもが病気をして、まだ集団生活が困難な時に、長い期間仕事を休むことが難しいご家庭も多いと思います。また小さい乳児期では、熱が出て翌日に下がっても、その一日の休養をとることで、本来の体力が戻り、回復も早くなると思います。そのような状況のときに、この病後児保育室の利用をしてほしいと思っています。

利用されたある一人の保護者から、「この『くろーばー』があって、助かります。お金には代えられません。看てあげたいのですが、どうしても看れないときに、ここのことを知り本当に助かりました。お陰様で体調も戻り元気になりました。また何かあった時には、利用させてください。」

という言葉をいただきました。

早いもので、開始して半年ですが、利用者も少しずつ増えてきており、「くろーばー」の必要性を改めて実感しております。これからもそのニーズに応えられるように、日々努めていきたいと思います。

ご支援ありがとうございました

（敬称略順不同）

ご寄附

平成二十二年六月十三日～
平成二十二年十月二十日

◇マツダドライサービス◇㈶東京青少年文化協会　理事長　久保島道長

後援会

平成二十二年六月十三日～
平成二十二年十月二十日

◇吉村愛子◇佐々木みつる◇石山弘之◇㈲海老山◇永井允子◇㈱ミートショップの鈴政◇㈱テクノコーポレーション◇川杉萬吉◇本田ふき子◇サン薬局◇篠原廣至◇日本エンゼル㈱西東京F・S・O◇ひかりのくに㈱東京営業所◇昭和の森エリアサービス㈱◇横田屋米店◇下坪唱三◇桑都ビル管理㈱◇魚政商店　田島　真◇ひらまつ◇クリエーティブカミヤ㈱◇㈱クリーンリース◇㈱Ｎｒｓｉｎｇ◇中村屋魚店　中村浩二◇マツダドライサービス◇㈲サンライズ企画◇ニューインテリア　松本　健◇山内　悦◇香山商店

※「同援だよりに名簿掲載希望欄へ」にご承諾を頂いた方のみ掲載しております。

平成二十二年度　永年勤続者表彰式

平成二十二年十月六日(水)原町ホームにおいて
同援永年勤続者表彰式が行われました。

■永年勤続三十年をむかえて

サンライズ万世
所長　南山　徳英

三十年前、全く福祉の知識がなく民間企業から同援に転職しました。私が今まで大過なく勤められたのは、先輩(上司を含む)、同僚、後輩方のお力添えがあったことに感謝しています。それと、家族の支えに対する感謝の気持ちも忘れてはいけません。

三十年間を振り返ってみると、最初に配属になったのが保育園でした。その時に先ず痛感したのは、自分自身の福祉に対する知識や認識のなさでした。そして、これからの自分の将来に対する不安でした。

しかし、先輩職員や同僚に支えられながら、その後障害者の施設、法人本部、特養、救護施設と勤務して今の母子生活支援施設で八か所の職場を経験しました。その間、楽あれば苦あり、山あり谷ありと誠に充実した三十年間でした。

三十年の内二十四年間は、事務員として仕事をしてきました。経理を担当していた時に、介護保険制度が導入され、大きな制度改革がありました。その制度改革によって会計ルールが大きく変わり、何度も研修会に参加し、遅くまで準備をして各施設の経理担当者皆で乗り越えたことが一つの思い出になっています。その他に庶務的な仕事や運営面にも関わってきたので、今の業務に大変役立っています。その後に介護の現場に転勤になった時は、不安で一杯になりました。介護の経験も知識も技術もありませんでした。そんな私を現場の職員が皆で助けてくれました。私にとってかけがえのない体験をすることが出来ました。それから次に、また全く経験も知識もない母子生活支援施設の施設長として異動となり現在に至っています。

最後に、永年勤続表彰にあたり、これからも同援発展のために、そして自分のために微力ではありますが、一層の努力をしたいと思います。今後とも変わりないご指導をお願い致します。

■永年勤続二十年をむかえて

昭和郷保育園
副主任　井坪　朋子

「大きくなったら何になるの?」「保母さんになるの!」幼稚園の担任が大好きだった私は、将来の夢を聞かれると、いつもこう答えていました。平成二年四月一日。私の夢は昭和郷第二保育園からでした。あの頃、マニュアルはなく全て先輩保育士のすることを見て学びました。一つひとつが新鮮で、知らないことも多く『社会人になった』という実感が湧いてきたのを覚えています。子ども達と一緒に行う事全てが、楽しくがむしゃらに仕事をした八年間でした。そして、昭和郷保育園に異動になってから、三度の出産をし自分自身が母となり、今までとは違った視点で子どもを見ることが出来たり、親と共感したりすることも出来る様になりました。

子どもをとりまく環境は大きく変化しています。又、保育所や保育士に求められることも増えてきています。入所児童の保護者の職業・生活環境などによりそのニーズは多様です。

昭和郷保育園では今年度より病後児保育事業を開設しました。現在の利用者サービスに留まらず、常にニーズに合った事業は何かを考え、地域に根ざした保育園にしていきたいと思います。最後に、私が二十年間仕事をしてこれたのは、周りの方々の支えのおかげです。ありがとうございました。

永年勤続十年をむかえて

昭島病院
師長　三原百合子

看護師になって二十数年、そのうちの約半分を昭島病院で過ごして来たことに改めて時の速さを感じます。

十年前の面接で訪れた時の外観を見ての驚き…帰ってしまおうかと、あまりにも老朽化した建物に足を踏み入れることすら躊躇したのを今でもよく覚えています。

それなのに不思議なご縁があったのでしょう、先輩方や同僚達に支えられ十年を迎えることが出来ました。

病院の建て替え、二度に亘る引っ越し、機能評価の受審…私自身もスタッフから管理職へ、と変化の多い日々だったように思います。

私は今、主任をはじめスタッフ、医師達にも恵まれ働きやすい環境の中で仕事をさせて頂いていますが、私たち看護師を含めた医療現場は、現在、多方面に亘って非常に厳しい状況に置かれており、ストレスの多い職場です。

そういった環境の中でいかに安心、安全、積極的に業務に取り組めるか、その為には、働きやすい、働き続けたいと思える職場を作っていく必要があると思います。

看護部だけで出来る事ではなく、医師はじめ他部署との連携、協力が欠かせません。

今後、どうしていくか、継続検討課題だと思っております。

師長としては、まだまだ未熟でご指導いただくと共に学んでいかなければならないことがたくさんあります。

これからもスタッフを支え、スタッフに支えられ、より満足度の高い職場を目指していきたいと思います。

十年を迎える事ができ、今まで関わってきた方々に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

永年勤続者表彰者名簿

30年勤続表彰者一覧

平成22年4月1日現在

施設名	職種	職員氏名
昭島荘	園長	相原幸仁
昭島荘	支援員	久保和正
むさしの保育園	保育士	森浩美
むさしの保育園	保育士	益永理恵子
昭和郷保育園	園長	石井好子
サンライズ万世	所長	南山徳英

20年勤続表彰者一覧

平成22年4月1日現在

施設名	職種	職員氏名
フジホーム	介護職員	吉田潤子
フジホーム	介護職員	山下幸子
さやま園	生活支援員	溝渕岳志
さやま園（事務局）	事務員	本間真樹子
昭島荘	支援員	馬場秀子
昭和郷保育園	保育士	井坪朋子
同援みどり保育園	保育士	武田朋子
同援さくら保育園	保育士	唐澤江里子
昭島病院	看護師	矢野信子

10年勤続表彰者一覧

平成22年4月1日現在

施設名	職種	職員氏名
フジホーム	介護職員	小金澤康哲
フジホーム	介護職員	山崎晴子
フジ・デイサービスセンター	生活相談員	岩木勝範
ニューフジホーム	介護職員	平川祐資
ニューフジホーム	介護職員	小出裕司
ニューフジホーム	介護職員	田口恵子
かえで	介護支援専門員	山口慎二
ひかり苑	看護師	高橋悦子
さやま園	生活支援員	古澤正彦
小茂根福祉園	生活支援員	三瓶達矢
小茂根福祉園	生活支援員	合田由佳
小茂根福祉園	生活支援員	杉浦慎一朗
小茂根福祉園	生活支援員	黒澤愛
昭島荘	栄養士	小池輝子
むさしの保育園	看護師	岡部暁子
大山保育園	調理員	竹内博美
同援みどり保育園	保育士	有馬麻耶
つつじが丘保育園	保育士	長田絵美
同援さくら保育園	保育士	荒野百合子
昭島病院	看護師	三原百合子
昭島病院	看護師	朝倉美穂
事業局	製版	友納昭恵
事業局	製本	小針美由紀
事業局	印刷	宮本寛
事業局		秋山芳三

しせつ通信

◆サンライズ武蔵野◆

今年も施設内行事の納涼会を七月三十日に集会室にて行いました。納涼会は、職員と利用者、そして利用者同士の交流を深めるために毎年行っている行事です。利用者のみなさんに提供する食事のメニューは、テーマを決め職員が全て手作りしています。この日は、お母さん方も夕食作りを休んで楽しいひと時を過ごします。利用者のみなさんから、「今年はどこの国の料理?」と楽しみにする声が上がるほど好評な行事です。今までに、「夏祭り屋台料理」「本格的ハンバーガー(アメリカン)」「カレーやナン(多国籍料理)」等をテーマに様々な料理・装飾を作りました。そして今年度は、イタリアンをテーマに、パスタ・ライスコロッケ・鶏肉のマスタード焼き・白身魚フライ・パンナコッタなどを作り、会場内は、国旗・絵画・バルーンアートなどの装飾をしました。

十四世帯中十世帯の参加があり、賑やかで楽しい雰囲気の中行うことができ、「おいしかった」「楽しかった」と言う声が多く聞かれました。

毎年たくさんの世帯が参加してくださるので、昨年度までは、人が多く集会室内に歩くスペースもほとんどなくなる程でした。しかし、今年度は、改築に向けた入所制限のため入居世帯数が少なくなっているので、スペースにゆとりがありました。

少しさみしい気もしましたが、スペースに余裕がある分、職員が利用者の方々の席へ行きやすく、子どもたちに「おいしい?」と聞くなど、例年より会話をする時間を多く持つことができました。お母さん同士の会話も弾んでいたようで、交流の場としてとても良い機会となりました。

来年度も、利用者のみなさんに喜んでもらえる会ができるよう、アイデアを出し合い、職員全員で協力して取り組んでいきたいと思います。

(長谷川記)

◆つつじが丘保育園◆

保育園の役割は社会情勢と共に多様化しつつあります。少子化とともに、核家族の増加、女性の社会進出に合わせて待機児や一時保育、学童保育利用者が増え続け、地域との関わりや支援は今や不可欠です。そのため、市の広報やポスター、メール等で園の情報を伝えたり、園庭開放や体験保育、行事への参加を呼びかけ、その中で在園児と触れ合い、学び合う等相乗効果ももたらしています。又、育児講座への参加や地域との交流の場、情報交換、育児相談の場としても利

同援俳壇

万世敬老園 あじさい句会

四方山の話弾みし団扇かな　月岡　久三

頼りなく風に身任せ百合の花　寺島　誠

たまに着る浴衣の糊の心地よし　平岩　武二

野の端に百合一輪が鮮やかに　松本　誠司

夏の夜ぐっと飲み干す麦茶かな　小島　照夫

用され、それをきっかけに入園される方もいます。昨年から始めた出前保育も、時間により年齢層豊かに楽しんで頂いています。また世代間や小学校との交流も行われ、年々保育士の担う役割も幅広くなってきています。

保育現場では縦割保育の中でお互いに何を手伝ったら良いかを自然に学び合い、助けが必要な子に手を差し延べている姿も見られます。

まだ縦割保育の良さを生かしきれず沢山の問題が有り、保育の工夫も必要なのが現状です。しかし人格形成上大事な基礎作りの時期にある『三つ児の魂百までも』や『川上清めば川下清む』を忘れずに、「私が一人で出来る様に手伝ってね」の心の声を聞き、子ども達から学ぶ姿勢を大切にして、地域と関わりながら生命の援助者としてこれからも職員一同、資質向上に向けて取り組んでいきたいと思います。

（永澤 記）

◆東大和市ふれあいデイセンターひかり苑◆

東大和市ふれあいデイセンターひかり苑では、利用者の方の有する能力の維持向上を目的として、楽しみや生きがいを充実するため、スウェーデンの先駆的な音楽活動「ブンネ法」の実践に取り組んでいます。

スウィングバーギターを触れることからはじめ、利用者の方は「いい音がするんだね」、「うまく出来るかな」など、様々な声が聞かれました。開始後三ヵ月間は三十分のブンネ法でしたが、（株）スウェーデン・クオリティケアと相談しながら、六ヵ月後には六十分の音楽活動が可能となり、利用者の方も「ブンネ法」を楽しみにされています。

ブンネ楽器を使い歌や動作の演習をすることで、認知症の方への記憶トレーニング、発声能力の改善の効果がありました。また、利用中及び在宅生活での言動が能動的になったり、肺活量の向上があげられます。詳細については「福祉サービス研究発表会」にてご報告させていただきます。

（増井 記）

昭島荘 俳句

秋桜の
風に揺れて楽しそう
岩佐 信吾

かたすみに
可憐にゆれる蕎麦の花
加賀屋美知子

数珠玉の
一つ一つが水晶です
河内 通子

数珠玉の
くろい光沢てのひらに
榎本 博吉

天高し
散歩の足もかるくなり
神 きぬゑ

こもれびの
里の柿の実たわわなり
石塚フキ子

夕食の
腹から食べる秋刀魚かな
池沢 秀雄

平成二十二年八月三日に、東京都の介護人材の育成を図る先駆的取組事例発表会に東京都同胞援護会からフジホーム・原町ホームの二施設が選ばれ、東京都社会福祉保健医療研修センターの講堂でおこなわれました。

「介護人材の育成を図る先駆的取り組み事例発表」

フジホーム
介護副主任　藤澤　剛

去る八月三日の「東京都特別養護老人ホーム経営支援・先駆的取りくみ」において、チューター制を導入しマンツーマンで行う人材育成の発表をさせていただきました。

最初に考えたことは「介護職における先駆的な人材育成とは何か?」ということです。キャリアスキルにより、介護職員を新人・中堅・指導的職員の三人一組のグループ体制とし、法人のコンピテンシーを使って介護全般に渡り、定期的にスキルアップ達成状況、理解度をチェック表に記入していきました。重点目標を互いに確認しあって段階をすすめ「教える側」のコミュニケーションスキルの向上と職場内のOJT強化を図りながら、お互いに成長していこうとするものです。これはまた、初心者にありがちな疑問のスピーディな解消と、メンタルヘルスケアにつなげるためでもあります。

介護保険制度が始まって十年。介護を取りまく環境や雇用情勢の変化と定着化への促進、ご利用者に寄り添い満足してもらえる施設であり続けたいと願いながら「原点・基本」を改めて見直し、時代との調和を図るためにも、この取りくみが先駆的に考えられていいのではないかと思いました。

「持ち上げない介護宣言」

原町ホーム
介護副主任　河野　雄太

平成二十一年度東京都特別養護老人ホーム経営支援事業における「介護職員の技術向上のための取組」の先駆的事例として原町ホームの「持ち上げない介護」が選ばれ、去る八月三日(火曜日)に十五施設のひとつとして発表させていただきました。

詳細は別記(本文二ページ)の通りです。「持ち上げない介護」は北欧では常識として定着している介護技術ですが、日本においてはまだまだ普及されておりません。今回の取組の中で、スウェーデンクオリティケアとの話し合いや実際のスウェーデン人看護師とのスカイプ(パソコンを通して会話)を通してその点に着目し、導入する手段として評価表シートを作成致しました。

発表後のアンケートでも、「フレックスボードを試してみたい」「福祉用具の上手な使い方を検討したい」等の声が数多く寄せられていました。今後は原町ホームも施設及び組織全体の取組として、さらなる深化を求め、ご利用者及び職員の「安心・安全」に寄与していきたいと考えています。

雑感

今年の夏は、真夏日に変わり、猛暑日という言葉が連日、テレビなどの天気予報で繰り返し報道されてきました。

気象庁は、こうした今年の天気を「観測史上初めて」と発表していたかと思います。最高気温、ゲリラ豪雨の雨量など、けた外れのものばかりでした。こうした変化は、毎年少しずつ起こってきたことかと思いますが、「とうとうここまできたのか」といった感もあります。

エコ活動、自然保護といった各地で毎年様々な動きが大なり、小なりあります。省エネタイプやエコなどの冠をつけた商品も数々売られるようになりました。しかし、今年の夏のような天候を体験すると、そうした活動が追い付いていないことも一つの事実ではないかと思います。

何事も手遅れにならないように、自らも考えていかなければならないと感じつつ、この暑い夏をなんとか乗り切りました。

(飯島　記)

ー表紙の写真ー
「山中湖にて」　(平尾正二　氏)

平成二十二年十月十五日　発行
東京都新宿区原町三の八
電　話　〇三(三三四一)七一六一
社会福祉法人 恩賜財団 東京都同胞援護会
発行者　牧野　洋一
印刷所　東京都同胞援護会事業局
東京都千代田区外神田一―一―五